

浜松地域の不登校支援の情報拠点及び居場所支援に関する研究

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 子どもコミュニケーション学科

指導教員：准教授 笥有子、講師 李受眞

参加学生：馬塚倭空、山田乃愛、朝田優花、片山紗綺、森谷美月、水島慶

1 要約

児童生徒一人ひとりのニーズに応じた多様な学びの場の構築を目指し、「不登校支援ワンダーワンダー」と称したプロジェクトを発足した。まずは児童生徒とその保護者、大学生等の居場所支援を目標に月1回の定例会を開催することになった。その中で、前半の3回の活動を通して、アート活動を行うことによる安心感とコミュニケーションの活性化が図られ、9月以降の活動では主催側でピアサポートと合わせてアート活動を行うことになった。本稿で定例会のアート活動の具体的な実践を紹介する。また、浜松市内のフリースクールでのインタビューをまとめ、大学の学園祭にて常時パネル展、座談会を通して情報発信を行った。

2 研究の目的

「不登校支援ワンダーワンダー」と称したこの活動では、児童生徒一人ひとりのニーズに応じた多様な学びの場の構築を目指しており、各ケースに応じた対応策を作り上げることが重要である。従って、各事例に対しては、一人ひとりの児童生徒を見つけ、粘り強く居場所の安全性の確保を行い、身近な立場である大学生等と交流を通しての人間関係の回復を目指し、必要な支援につながっているかを把握することで、対応方法の事例を蓄積し、ケースに応じた支援のあり方を確立するのが理想である。具体的には、プロジェクト開始にあたって、まず保護者へのピアサポートを行うことで不登校児童生徒の保護者を対象にエンパワーメントを図る事業、相談支援と他機関連携の情報共有により、不登校児童生徒の存在を具体化するプロジェクトを試験的に行うこととした。そこで、今年度は下記の3点を目標として本活動を行った。

- ①大学生・教育関係者・不登校児童生徒の家族・不登校に関心のある一般市民と不登校児童生徒で集う機会を作り、不登校についての基礎的知識や問題意識の共有・課題の整理を行い、居場所支援の第一歩とする。
- ②浜松市内のフリースクールの3カ所で見学と聞き取り調査を行うことで、実態把握、情報交換を行う。
- ③浜松学院大学の学園祭の機会を活用し、浜松市内のフリースクールの3カ所に関するパネル展を通じた情報提供、保護者・関係者の座談会を実施することで浜松地区の多様な学びに関する一般への情報提供とネットワークの構築を目指す。

3 研究の内容

不登校児童生徒とその保護者と大学生、教育関係者が集まり、自由な意見交換と情報共有

の場を提供するために、月1回集まる場所と時間を設定した。この定例会は、5月、6月、7月、9月、10月、11月、計6回行われた。夏季休業中の8月を除き、毎月第2金曜に大学内に不登校児童生徒及び保護者が訪れることのできる時間（13時-15時）を設定し、情報収集やピアサポート、アート活動ができるようにした。

アート活動では、会場でファシリテーターによる伴走を伴う造形ワークショップとしての実践、自宅にて保護者と児童が行う活動を、児童生徒それぞれの実態に合わせて組み合わせられるようにした。具体的には、不登校児童やその保護者を対象とした図画工作の実践を行い、その場で行った工作が自宅でできる「体験キット」をお土産として持ち帰ってもらった。これは、不登校児童の新しい場所に対する心理的な抵抗感などを加味した中で、できるだけ多くの児童に図画工作の活動に触れてもらうためのシステム構築を検討する中で生まれた方法である。例えば、保護者が会場に来て図画工作の実践に触れることができるが児童本人が来られない場合、来ることは出来たがその場では実践に参加できない場合など、様々な状況が想定されるため、心理的に安心できる場所である自宅で材料用具を見てもらい、興味関心が高まった時点やそれぞれが活動に対する意欲が湧いた時点で活動してもらうことができるよう配慮した。

例えば、10月の定例会では、季節を意識しハロウィンをテーマとした工作を行うことにした。製作できる時間が30分であるため工程がわかりやすく、かつ活動の充実感があり、完成作品に見応えのある工作を探し、お化けのオブジェを作る工作を選択した。この製作は、絵を描く等の作品と比べると作品の優劣を感じにくいいため、図工に苦手意識を持つ人も取り組みやすいのではないかと考えた。また、完全に乾ききるまでには形の調節が可能であり失敗しても大丈夫と考えながら製作できる点も題材設定をした理由の一つである。今回は、発達段階や製作に充てることのできるエネルギーの量などを考慮し、すでに乾いたお化けを用意し、デコレーションするだけでも体験してもらえるようにした。意欲があり、最初から行えそうな場合は指導者と共に型を作るところから行うことにした。本実践には、大学教員3名、大学生3名、不登校の児童2名、不登校の児童の保護者2名、不登校支援に関心を持つ一般市民1名が参加した。ワーク開始時は大学関係者と不登校児童一名がそろっており、不登校児童一名と保護者二名、他一名の方はそれぞれ時間差で参加した。保護者のうち一名は時間の関係上すでに用意しておいたお化けにデコレーションをするところから行ってもらった。活動をやって終わると、感情の開放はできるかもしれないが、そこにフィードバックを追加することで、自己評価・自己成長、思考の整理、自尊感情の向上、モチベーションの向上などの効果がさらに得られるのではないかと考える。また、不登校児童が活動に

表1 フリースクールへのインタビュー項目

大項目	小項目
運営	<ul style="list-style-type: none"> ・フリースクールを開いたきっかけ ・教育方針、理念 ・1日の流れ、カリキュラム ・SNS、広報等（心掛けていること） ・先生、スタッフ（資格等） ・資金繰り（月謝、支援金等）
子どもの様子	<ul style="list-style-type: none"> ・規模、子どもの集まり具合 ・通学期間、卒業があるのか ・進路等の事例、事情（進学情報） ・どこから通っているのか
社会との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携 ・地域社会との関わり
公教育との関係性	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育をどう考えているのか ・学校との連携 ・その他

対してエネルギーを使うことが困難になっているとすると、エネルギーを切れさせる要因を作るべきではなかったと感じる。これが、家で作る場合であれば、乾かす時間をとることで休憩にもなりエネルギーを回復させる時間を作ることができるので逆にプラス効果になるとも考えられる。不登校児童支援では、時と場所・活動内容によって不登校児の持てるエネルギー配分を考えることが大切になると考える。

学校で不登校状態が確認された時には、まず初めに校内の居場所が、次に市の委託を受けた NPO 法人が運営している校外学びの教室（旧適応指導教室）への登校が想定される現状にある。フリースクールについては、学校との連携に遅れが見られるのが現実である。そこで今回、本プロジェクトでは、浜松市内のフリースクールの内、設立時期・在籍児童生徒数等からまず、NPO 法人ドリームフィールド・NPO 法人フリースクール空・デモスティックスクールび〜だの3カ所との連携を目指し、各代表者への聞き取り調査を行い、学園祭出展ブースでインタビュー内容の掲示を行うこととした。インタビュー実施の担当者は箕・李・学生1名である。質問事項について教員2名と学生1名で相談によって項目を作成し、各フリースクールの代表者にインタビューを実施した。定例会で整理された課題の一つとして「不登校児童生徒のためのフリースクール等の多様な学びの場の情報が一元化されておらず、情報収集が困難である」ことが挙げられた。そのため、浜松市内のフリースクールの3カ所にて行った聞き取り調査をまとめ、それぞれを紹介するパネルを作成し、11月18日と19日の浜松学院大学の学園祭で常時パネル展を開いた。常時パネル展には、おおよそ50名の来場客があった。

11月19日は浜松市内のフリースクールの3カ所（デモスティックスクールび〜だ・NPO 法人ドリームフィールド・NPO 法人フリースクール空）から代表者を1名ずつ呼び、教育や不登校等をテーマに座談会を行った。不登校の児童生徒とその家族、教育関係者、大学生、地域住民等の20名が参加した。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

当初は以下の3点を目的とした。

- ① 学生・教員・当事者家族・不登校支援に関心のある一般市民などで集う機会を作り、不登校支援についての基礎的知識や問題意識の共有・課題の整理・浜松地域の実態調査を行う。（本年度は特に公立学校からの紹介が難しく保護者の情報収集能力に左右される状況にあるフリースクールとの連携を模索する。



図1 フリースクール紹介パネルと作品展示の様子



図2 11月19日の座談会の様子

- ② 11月に浜松学院大学学園祭の機会を活用し、保護者・関係者の交流会を実施しフリースクール等の情報提供やネットワークの構築を目指す。
- ③ 5月から1月の間、毎月第2金曜に大学内に不登校児童生徒及び保護者が訪れることのできる時間を提供し、フリースクールや適応指導教室に向かう前段階の居場所として活用したり情報収集や相談ができるようにする。

(2) 実際の内容(Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など)とその理由

当初の計画①と③→A、月1回に不登校児童生徒とその保護者と大学生、教育関係者が集まり、自由な意見交換と情報共有の場の機会を作った。定例会では、児童生徒と大学生のコミュニケーションの機会の確保、保護者同士や教育専門家との交流等を持つことができた。

当初の計画②→A、浜松市内のフリースクールの3カ所にて行った聞き取り調査をまとめ、それぞれを紹介するパネルを作成し、11月18日と19日の浜松学院大学の学園祭で常時パネル展を開いた。常時パネル展には、おおよそ50名の来場客があった。11月19日は浜松市内のフリースクールの3カ所(デモスティックスクールび〜だ・NPO法人ドリームフィールド・NPO法人フリースクール空)から代表者を1名ずつ呼び、教育や不登校等をテーマに座談会を行った。

(3) 実績・成果と課題

保護者支援については、支援者との交流や情報共有・場の開放が保護者自身の「居場所」としての安心感への効果が見受けられた。また保護者の信頼感が間接的に児童生徒への接点になっていく事例が認められた。

(4) 今後の改善点や対策

浜松地域の中で、今必要とされる支援は何か、そして本プロジェクトのリソースをどのようにそこに集約させるか、また、必要な専門性は何か。さらに支援を精緻化していくために必要な実践は何かについて、丁寧な検証が必要である。

5 課題提出者・地域への提言

2023年度は初めて静岡県教育委員会が県内24のフリースクール、市町教委、教育支援センターの担当者計約80人が出席して県庁で初開催した連携協議会に、今回インタビューを行った3ヶ所のフリースクールのうち2ヶ所の代表者が出席をしていたことがわかった。今後地域毎の会合を検討中ということで、静岡県内でも学校とフリースクールの連携が進む可能性が出てきた。大学生と教員が教育課題を考えるフィールドとして、地域課題解決のために大学のプロジェクトの可能性を検討し、実践していくことが必要なのではないか。

6 課題提出者・地域からの評価

浜松市立高校放送部からの取材を受けた。また、保護者・関係者・児童生徒の参加者は後半に向けて増加し「ワンダーワンダー、とても充実した活動でした。ぜひこれからも継続していただきたいと思います」との保護者のコメントや次回スケジュールの問い合わせがあるなど、次年度の継続的な活動に期待が寄せられた。